

## ネットワーク日本研究のための報告

ヴォルフガング・シャモニ

ドイツの日本学の現状は大変複雑なものですので、ここでは、主に制度的・組織的な面に重点をおいて短く報告いたします。先ず現在のドイツの日本学の制度的組織的問題（その背後には勿論学問の目的、方法の問題が潜んでいる）を私なりに要約してお伝えし、それから日本の皆様の便宜を計って、a) ドイツの日本学の組織、また b) 日本研究の主な雑誌をリストアップして御報告いたしたいと思えます。予め申し上げておきますが、ドイツの日本学の状況は三十年まえから激しい議論の対象になっていますので、それについては誰が発言しても、どうしても主観が入り込み、かなり私的な発言になります。

ドイツは御存知の通り連邦共和国ですが、文教政策も州の管轄であって、十六州がそれぞれ文部省を有し、中央には文部省が存在しません。勿論各州の文部大臣が定期的に集まって全国的なガイドラインを決めるわけですが、大学の面では、むしろ州毎の競争という観がつよいようです。ちなみにドイツの大学はすべて州立で国立大学は存在せず、最近になってわずかながら私立の単科大学（経済大学、医科大学）が出来てきました。さて、一時期日本が驚異的な経済発展をなしとげて世界中の注目を浴びたこともあって、それぞれの州政府が自分の大学に日本学科を設置するのに熱心で、今では殆どの州に少なくとも一つの日本学科、ときには二つも三つもあるところもあります。現在は十州の合計十九の大学に「日本学科」が設置されているのです。いささか小学科乱立という感じがなきにしもあらずです。そんなことで研究者人口も多く、国際交流基金が1999年に出した *Directory of Japan Specialists* によれば、360人で、ヨーロッパで一番多いようです（イギリスは241人、フランスは203人、ロシアは176人）。これは一見商売繁盛にみえますが、しかし実はそこにはいろいろな問題が潜んでいるのです。

### a) ドイツの日本学の組織

1 それぞれの学科（研究室）は比較的小さいものです。全国十九の日本研究科（名称はまちまちですが）のうちの半分ぐらいは教授一人、研究助手一人、日本人講師一人という所帯で、十分な言語教育をほどこすにも苦勞し、また学生の用に供し得る図書室をも作れないのが実情です。私が勤めているハイデルベルク大学は1985年創設の若い学科ですが、現在は教授二人、研究助手二人、日本人講師二人、司書一人、又図書二万五千点（三万冊以上、その五分の四は日本語）、日本学を主科目としてとっている学生は百五十人という規模で、ドイツのなかでは中ぐらいの大きさのものです。もっと大きいところもありますが（ハンブルク大学、ミュンヘン大学、ボン大学、ベルリン自由大学）、多くの研究室は前述のような小所帯なので、学生に日本研究の可能性を十分に示し得ないし、ましてや学者間に活発な議論とか、共同研究とかを可能にするような「臨界量」にはほど遠いというのが実状です。

2 ドイツの日本学はもともとかたい（見方によってせまい）文献学的な基礎があったのですが、そ

れには学生からも社会からも批判があつて、二十年ぐらい前から社会科学的研究も取り入れて、今や文学研究、言語学、歴史学から社会学、政治学、メディア研究まで非常に広い研究分野を含んでいます。しかし広がったのはいいのですが、あまりにも多様（雑多）で中心を失っているのではないか、これでも一つの学科といえるかとの疑問を呈する人もいます。何百人もあつまる学会は立派に見えますが、そこに実際の程度の共通な議論ができるかと考えると頭がいたいわけです。

- 3 日本語の「学科」にあたるドイツ語は二つあつて、それは Fach と Disziplin です。Fach はもともと「仕切り」とか「引き出し」という意味で、ものをぶちこんで片付けるものですが、極めて便宜的な単位をいいます。他方 Disziplin はもともと「規律」という意味で、固有の研究対象と固有の方法論をもった専門領域をいうので、文字通り規律に服するという意味です。社会学とか言語学とか文学研究はその「規律」をもった学科です。そこへいくと、日本学は雑多な Disziplin（規律をもった学科）の寄り集まったところ、つまりはただの便宜的な仕切りという意味です。それでますます日本学内での研究交流が難しくなるのです。
- 4 この状況を克服するには基本的に三つの戦術があります。一つは解体です。つまり、日本学の諸成分をそれぞれの Disziplin に発展的解消するということです。この解体論は三十年前には若い研究者や学生の間につよかったのですが、今はあまり聞かなくなりました。もう一つは、学科をそのままにして、自分の専門と同じ専門の日本の研究者にパイプを通して、より大きな学問の世界と繋げようとするということです。この場合は研究者には自分の研究と学生教育とをどう繋げるかという問題が出てきます。第三の戦術は日本学を広い意味の文化研究科につくりかえて、この科目に新しい中心を与えるということです。私は第二と第三の戦術を組み合わせる必要があると思っています。その際には、この二十年来の日本学内での人文科学と社会科学の分裂が克服されつつあった（それはたとえ、ただの平和共存であったとしても）という遺産を放棄しないことが重要だと思います。私自身はむしろ文献学的伝統をふまえて研究していますが、旧態依然の文献学にかえることは解決にならないと思います。

---

日本研究に携わっているドイツ語圏の研究者の組織には次のようなものがあります。簡単に述べますが、それぞれのインターネットのホームページをあげますので、もっと詳しいインフォメーションをお知りになりたい読者はそれを利用していただきたいと思います。

#### 1. Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens（略称 OAG）

これは、古めかしい名称でも解るように、1873年（明治六年）東京でつくられたもので、ヨーロッパの日本研究者組織としては一番古いものの一つです。終戦の1945年に自然解消したのですが、まもなく東京でも、ハンブルクでも同じ名前の組織が再建されて、現在、ドイツと日本とに二つの全く同名の別組織が存在しています。

東京の OAG のホームページは <http://www2.gol.com/users/oagtokyo/> です。この東京の OAG は日本にいるドイツ語の人の親睦会でもあって、会員のために講演会、学習旅行なども組織し、毎月通信報を出したりしています。東京に図書館を設置した OAG 会館があります。

ハンブルクの OAG のホームページはハンブルク大学日本学研究室のもので、

[www.uni-hamburg.de/Wiss/FB/10/JapanS/index.html](http://www.uni-hamburg.de/Wiss/FB/10/JapanS/index.html)

この会の主な活動は三種の雑誌を発行 (Nachrichten der OAG; Oriens Extremus; Kagami) することです。なお、このハンブルク大学日本学研究室 (1914年創立で、ドイツで一番古い日本学研究室) のホームページにはドイツ語圏のすべての日本学研究室の住所のリストがあげられていて、又リンクがつけられています。

## 2. Gesellschaft für Japanforschung

ホームページ : <http://www.gjf.de>

この会は1990年創立で、研究機関ではなく、大学で研究者として働いているものの組織です。主に日本学科の間のインフォメーション交換を目的とし、又社会 (政治家) にたいして日本研究者の立場を代弁するために作られたものです。名称に故意に「ドイツ」を含ませなかったのは、オーストリア、スイスの日本研究者をも網羅しようとするためでした。なお、三年に一度開催されるドイツ語圏の日本学学会 Japanologentag を組織しています。これは毎度違う大学の日本学研究室が受け入れ機関になって、最近のものは1999年にトリール大学で開催されたものです。

## 3. Vereinigung für sozialwissenschaftliche Japanforschung

ホームページ : <http://www.jdzb.de/vsjf.htm>

この会は1988年の創立ですが、従来の日本学への不満から発足したものです。従って日本学内の研究者だけではなく、他の学科 (社会学、政治学その他) に所属している研究者をも網羅しているのが特色です。毎年共通テーマをきめて学会を開いていて、今年 (2000年) はハイデルベルク大学が会場になっています。

なお、ドイツの殆どの研究者が全ヨーロッパの日本研究者の組織 European Association for Japanese Studies (略称 eajs、ホームページ <http://www.eajs.org>) にも属しています。

## 4. 研究者の組織ではないのですが、東京に1988年に創設されたドイツ国立の総合日本研究所として Deutsches Institut für Japanstudien (<http://www.dijtokyo.org>) があります。これは純粹の研究機関で、研究結果を年鑑で、または単行本として発表し、また英語とドイツ語でニュースレターを発行しています。

### b) ドイツの日本研究の専門雑誌は次の通りです (創刊年代順)。

#### 1. Nachrichten der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens.(略称 NOAG)

1918年創刊、原則として年に二回発行 (最近は年に一回)。上記のハンブルク大学日本学研究室から

発行されています。東アジア研究全体に亘っているので、中国研究の論文も入っていますが、日本関係の論文が多いようです。

## 2. Oriens Extremus.

1955年創刊、原則として年に二回発行（最近は年に一回）。これもハンブルク大学日本学研究室から発行されています。東アジア研究全体をあつかっており、中国研究、東南アジア研究の論文が多いのですが、日本関係のものもあります。上記の二つの雑誌には硬い研究論文の他に新刊の研究書の書評なども多く載せられています。

## 3. Kagami.

1974年第二次の Kagami が創刊されたが、発行は不規則。上記の両雑誌と同じくハンブルク大学日本学研究室の発行。アクチュアルな日本の雑誌論文（政治、経済、文化関係）を翻訳して、註をつけ、ドイツの新聞等に提供するのが主眼の雑誌です。

## 4. Bochumer Jahrbuch zur Ostasienforschung.

1978年創刊、年に一回。中国研究が多いのですが、日本研究の硬い論文や書評をものせています。ボッフム大学東アジア学部が編集しているので、いきおいボッフム大学の研究者のものが多くなっています。

## 5. Bonner Zeitschrift für Japanologie.

1979年創刊ですが、今は雑誌よりも不規則に出る研究書のシリーズに変貌しました。ボン大学日本学研究室が発行。このような研究室発行の研究書シリーズ（多くは博士論文）は他にもいくつかあります（Hamburg, Trier, Marburg, Tübingen 大学の日本学研究室）。

## 6. Hefte für Ostasiatische Literatur.

1983年創刊、年に二回ミュンヘンの iudicium verlag という出版社より発行。なかなか市場には出にくい中国、韓国、日本の文学の翻訳を発表する機関としてつくられた雑誌です。東アジア諸国の古典・近代文学を翻訳して、一般文学読者に供しようというものです。なお、この雑誌は翻訳の他に、毎号「ドイツ語圏における日本文学ニュース」、また隔号に文献目録「ドイツ語圏における日本文学の翻訳及び研究」（新聞・雑誌等の記事までふくむ）という詳細をきわめる文献目録を掲載しています。

## 7. Japonica Humboldtiana.

1997年創刊、年に一回の雑誌で、東ベルリン・フンボルト大学日本学研究室から出ています（出版社は Wiesbaden の Harrassowitz 社）。特にフンボルト大学の研究者の硬い研究論文や書評をのせています。

## 8. hon'yaku. Heidelberger Werkstattberichte zum Übersetzen Japanisch-Deutsch.

1999年創刊、年二回ハイデルベルク大学の日本学研究室より発行。小さいものだが、日本語からの翻訳の水準を上げるため、文学や思想文献を日本語原文・ドイツ語訳文を対照して載せ、それに細かい注釈をつけています。特に翻訳の困難な箇所には翻訳の選択肢を示し、翻訳家の参考になるよう努めています。

了

## ブラジルにおける日本研究について

織田 順子

ブラジルにおける日本研究は欧米に比べてはるかに若く、まだまだ広がる可能性を持った分野であると言えます。

日本研究がブラジルにおいて始まったのは、今年ブラジル社会の中で92年を迎えた日系移民に負うところが多いのですが、現在の研究状況は日系社会の枠組のみにとどまらず、大学、大学付属研究機関の範囲にまで及んでいます。鈴木妙サンパウロ大学日本文化研究所所長の略史によると、日本関係の日本語文献の他にポルトガル語（以下ポ語と省略）文献が初めてブラジルで書かれたのが40年代、さらに日系社会を対象とする研究の進展が50年代に始まり、引き続き初の日本文学作品のポ語翻訳、日ポ語辞書の編纂、サンパウロ大日本語日本文学講座開設を見た60年代—これらを基盤とした日本研究の多様化が70年代から見られるようになったということです<sup>1)</sup>。

'98年の国際交流基金の調査によると、日本研究をブラジルで行なっている人口は約100名、'88年の調査と比べると50%の増加が見られます<sup>2)</sup>。研究者が所属する機関は主に公立大、それも日本語科のある文学部が圧倒的ですが、他の学部の研究者も最近注目されつつあります。

正規の日本語（日本文学）学部講座をもつ大学はサンパウロ大学（以下サ大）、サンパウロ州大、ブラジリア、リオデジャネイロ、リオグランデスルの連邦大です。この他、学部でなく語学センターで日本語を教えるカンピーナス大、課外講座をもつロンドリーナ州立大なども挙げられます。以上の大学のうち、講座教員を含むか、それを中心とする研究機関として、サ大の日本文化研究所、ブラジリア連邦大のアジア太平洋研究所などがあります。

私の属しておりますサ大日本文化研究所は、'64年に開設された同大文学部日本語日本文学学部講座をサポートするために設立されました。主な事業として、日本からの客員教授招聘、研究指導、教科書編纂、主にポ語で書かれた日本関係論文集の年刊出版（現在19号）に携わる他、ブラジル全国の日本関係（日本語、文学、文化）教師集会を企画し、8回まで主催しました。（ちなみに、9回目からは他大学がもちまわりで主催することとなり、今年は11回目の集会がブラジリア連邦大で開催されます）また、サ大文学部では、'96年にブラジル初の日本語・日本文学・日本文化大学院講座が開設されました。同大研究所は、ラテンアメリカとされる4万冊の蔵書を持ち、現在新しい大学院のニーズに答えるべくデータベースを作成中ですが、予算の問題、人員不足などで情報化の作業はなかなか進まな